

ついに来た水田農業のチャンス

日本農業新聞によれば、農林水産省は10月16日、2021年度産の主食用米の適正生産量を679万tに設定した。これは前年より30万t以上少なく、減少幅は過去最高で700万tを割り込んだ。この適正生産量を実現するためには、今年の実産量から50万tの減産が必要であり、面積にすると10万haの転作が求められることになる。

同紙によれば「山形県農業法人協会の平田勝越会長は、50万tの減産が必要となることについて、『非常に驚いた。担い手の生産マインドが冷えるのは必至だ』と懸念を示し、20年産の米価が生産意欲を保てる限界の水準だとし、『これ以上、値下

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

がりすると産地の崩壊を加速させかねない』と不安視した」と農業界の声を代表させ、東日本の県再生協の担当者の言葉として「現状では、転作推進の手立ては限られる。非主食用米などへの転換をこれまで以上に進める必要はあるが、転作助成金となる水田活用の直接支払交付金の21年度予算概算要求額は、前年と同額。『県の産地交付金はほとんど消化している』と困

惑』していると書く。

さらに「農水省は16日、2020年産米の初月となる9月の相対取引価格を発表した。全銘柄平均の60kg当たり価格（1等、玄米）は前年同月比4%（676円）安の1万5143円で、14年産以来となる下げ展開となった。民間在庫量が大きく積み上がっており、現状は小幅下げにとどまる価格が、この先維持されるかが焦点となる」と書いている。

農業界はまさにお先真っ暗。コメ市況はどんどん下がっていく。こんなことは今さら驚くことや騒ぎ立てるようなことではなく、ずっと以前から誰もが「こうなるだろう」と考えてきたことではないか。

むしろ、コメ市況の下落を無理やり止めるために、その場しのぎの法外な補助金、交付金を餌にして主食用米市場からコメを隔離することを続けてきたことの結果である。

今後さらに進むコメの供給過剰という事態には目を向けず、どんな駄農にでもでき、しかも法外な交付金を貰える「飼料米」という世界のどこにもないような「政策作物」を農協界と農水省が続けてきたからだ。

僕が補助金付き大規模家庭菜園

とまで言って揶揄してきた大多数の農家による稲作。消費者に向かって「日本人ならパンをやめてもっとコメを食え」というような暴言を吐く農家もまだいる。しかし、米穀安定供給確保支援機構の「精米購入・入手経路」調査によれば、令和2年9月の調査でも15・9%が「家族・知人から無償で入手」している。数年前のその数字は25%くらいに達していた。農業界は自作自演でコメの供給過剰を演出してきたのだ。

本誌読者で畑作技術体系にチャレンジするだけではなく、自ら借地した農地に暗渠を作り、水田の乾田化を進めてきたような人は、きつとニマリしているだろう。本誌は、そんな読者に向けて「お前ら生活保護貰ってベンツに乗るヤクザと同じ」と悪態をついてきた。乾田直播で飼料米を作り、防除もしないでWCSで収穫すればこんな楽で法外な交付金にありつける経営判断はない。子実トウモロコシよりもおいしい。くれるというなら貰えばよいのである。でも、君たちの獲得した技術と勇気が生きるのはこれからだ。

来年以降、水田農業の世界は変わってくるだろう。政策に依存するだけで経営者面をしてきたコメ経営者は淘汰されていく。そして、離農はさらに進む。時代は君たちのものだ。